

■能楽の神髄について

越野…実は先日、宗家のお話として、「寿福増長の基」と言っんですか、「風姿花伝」の中の言葉を引用されたお話を拝見したのです。

観世…いわゆる幸福の元となるものを、ご覧になっておられるお客様へ、お配りする、と言っのでしうか。世阿弥が「風姿花伝」の中で、その言葉を使っておりますけれども、いろいろ難しいところがございます。と言っのは、その「風姿花伝」というのも、「花伝書」とは言ってはいけません。学者の方が、「花伝書」と言っとお花の方の「花伝書」であって、紛らわしいから、しっかりと「風姿花伝」と言っべきだ」とか、いわゆる世阿弥が子孫のために書いてたわけですから、別に拘り定規な事ではないのです。もって生活に密着してこそ、世阿弥の精神が生きていると思うのです。要するに、研



究者はみんな古文書学者ですから。私もそれを具現化して舞台で演じて、謡ったり舞ったりしてゐるわけです。ですからそのところが、随分大きなギャップがございます。残念ながら、もつとソフトにお能を楽しんでいただきたい。先代家元も、「面白くなくては能ではない」とはつきり言ってるのですよ。その精神を受け継いでやっております。ですから、本日、渋沢栄一の能を、世界初公開で上演致しますが、やはり渋沢翁の精神を、想像力を逞しくして観ていただきたいのですよ。

「あの頃は断髪令があったから、被り物はない」とか、そういう理屈ばかりを研究者は言っわけです。やっぱりお能は、夢とロマンがなければだめなのです。学者は家元じゃないのです。家元は私なので、それをね、すごく感じるのです。お能を舞う度に感じるのです。

越野…会場全体が「敷居が低くなった」って感じが伝わってきます。

観世…ええ、ですから、私はいろいろな講座でもお話ししております。鉋でいつも敷居を削ってるんです。削ってるんですけど、何故か邪魔する人がいるのです。しかし、「何する者ぞ」と思ってはね返します。この渋沢栄一翁の顕彰能の最後にも悪鬼が出てきます。いろいろ渋沢翁に悪さをしますが、それこそ、「何する者ぞ」という気持ちで邪気を払って退治する。爽快ですよ。だから、やはり、楽しくなければだめなんです。

越野…ありがとございます。ますます、この後の公演が楽しみになりました。よろしくお願いいたします。

観世…どうぞ、最後までお楽しみ下さい。

■日本資本主義の父

越野…渋沢翁は、銀行・保険・陸海運物流などの五〇〇以上の会社の設立運営に携わられたということで「日本資本主義の父」と呼ばれることもあります。三村名譽会頭が、渋沢栄一の「ここがすごい」と思われるところがあつたらお話しただきたいんですが。

三村…私が思っているのは、やはり渋沢栄一は、大きな合理性を生かして貫いた、こういう人だと思ひます。我々は誰でも、自分なりの合理性は持つてゐるわけで、それは自分の家族を幸せにしようとか、自分の会社を儲かる永続的なものにしようとか、これももつともなことですけども、渋沢栄一の場合は、それを超えた大きな合理性。例えば、社会全体を發展させるとか、要するに大きな視野とか歴史観に基づいた合理性、これを生かして貫いた。これが渋沢栄一のすごさだと思つております。渋沢栄一は四八の企業を創りました。その大部分が、例えば、銀行とかあるいは電気会社とか、保険会社とか日本に必要なインフラ産業でした。あるいは、生活を豊かにするような商品、例えばビールとか、あるいは絹や綿織

物とか、そういう会社でした。一〇〇年以上経つた今でも「一社が生き残つてゐる。これはやっぱり渋沢栄一の目の付け所が良かった」ということがありますし、渋沢栄一の思想が綿々と受け継がれてゐることの証左だと思つてゐます。七〇歳を超えると渋沢栄一はむしろ行動の人から、ビジョナリーな人になりました。それ以降は「論語と算盤」、私益と公益の両立ということを、自分の思想の集大成として生かして皆に伝えようとした。

明治時代の日本というのはまだ初期資本主義で、人材も育つておらなかつたし、資本も集積されておらなかつた。ただ、渋沢栄一が事業をやるといふこと自体が、資本と人を集め、「渋沢栄一のやつてゐることは信用できる」という形で、いろんな企業が生まれた。ある意味では、初期資本主義の欠陥を補つたのが渋沢栄一の個人的な、人を引き付ける信用だったと思ひます。

■社会福祉への取り組み

越野…三村名譽会頭からは、経済人の視点でお話いただきましたが、樺山先生、二方で渋沢栄一は、六〇〇になんとなす社会福祉事業にも関わつてゐます。こちらの観点から、どんなことがござい

ますか。

樺山…実は日本の社会は資本主義経済だけで近代社会を創つたわけではない。最も大事なところは、それを創つた人間たちをどうやつて社会の中で抱え込みながら、全員が少しづつ豊かになつていき、安心して住むことができるような社会を創るかという活動、これによつて日本の近代社会ができたんです。実は渋沢は、そうした四〇〇いくつの会社と同時に、いわゆる社会福祉に関わるような事業、あるいは人間の健康や安全に関するような事業について、大変強い関心を持つてゐました。例えば、東京養育院では、単に子どもさんたちを育てるだけではなく、体の調子が悪くて貧乏な暮らしをしてゐた方や路頭に迷つてゐる方を何とかして助けようではないかという、今で言つと福祉事業といったことに力を注ぎ、現在、東京都健康長寿医療センターとして受け継がれております東京養育院は、渋沢が若いときから亡くなるまで、実に五〇数年間に渡つて、その院長を続けられました。

そうやつて福祉事業、あるいは医療について強い関心を持ち、リーダーシップを発揮したという意味では、単に産業を創るだけではなく、むしろ困つてゐる方々と緒になつて社会を創る。これが日本の社会の在り方なんだということ、常に説いて回つた、「日本の社会福祉事業の父」だと言つても間違ひではないと私は思つております。